

平成28年度

聖坂学園 事業所・施設事業報告

オリブ工房（パン工房オリブ）  
ナザレ工房（パン工房ナザレ）  
シーダひのき工房（カナン工房）  
シーダ日野学園  
オリブの家  
ナザレンホーム  
眞砂ホーム  
横浜市神之木地域ケアプラザ

社会福祉法人聖坂学園

## 1. 施設運営について

平成28年度においても法人理念を基として、障害福祉分野では、施設入所支援、障害福祉サービス事業の生活介護、短期入所事業、共同生活援助事業を行いました。又、地域ケアプラザは地域福祉の拠点として、介護保険制度及び横浜市委託事業における各事業について、ほぼ事業計画に基づいて実施いたしました。

障害福祉分野では、平成13年4月に開所したオリブ工房従たる事業所「パン工房オリブ」は、平成28年6月30日をもって閉鎖しました。また、シーダひのき工房従たる事業所「カナン工房」は3月末で廃止しました。予てより平成29年4月に、中区小港町に新規施設を計画の中で、機器などの移設も踏まえ、準備期間で閉鎖の時期を考えておりました。そのような中で、急遽職員に不足が生じ、労務管理も含めた上で大変厳しい支援体制となり、考慮を重ねた上、パン工房においては、廃止の時期を早め、7月より、パン工房の利用者と支援員は、オリブ工房にて一緒に活動しました。

シーダ日野学園においては、平成28年度は、前年度の虐待事案からの再出発として、全職員が新たな決意を持ってスタートしました。ユニットリーダーの主任職員と管理職がそれぞれに作成したものを合わせた「日野学園障害者虐待再発防止計画Ⅱ」を、職員会議と保護者会にて説明の上、実践を開始しました。ユニットの閉鎖性を打破する為に、ユニットを超えた活動の実践を通して職員個々のコミュニケーション力を高め、協力体制の基に仕事を進めていくということが主な内容です。具体的には、自分のユニット以外で1日勤務を体験する「ユニット間職員交流研修会」や、利用者がユニットから出て仲間と共に活動する「AM合同生活」の実践を進めました。

また労働安全衛生法により、職員の心身の健康増進を図ることを目的として「産業医」を選定し、衛生委員会を毎月開催する中で、職員の検診結果の確認や職場巡視、超過勤務や労災の実態の確認等を行ってきました。10月には初めて全職員対象に「ストレスチェック」を実施しました。今後も継続して、職員の心身の健康の増進や労働環境を考える機会としていきたいと思っております。

高齢者福祉分野では、地域ケアプラザの設置目的（使命）『市民の誰もが地域において健康で安心して生活を営むことができる』ように、また神之木地域ケアプラザの重点方針、「支援が必要な人に寄り添い丁寧な支援」を行うことを目標に、行政、区社協、地域、保健・医療機関、同業者等と連携・協働し、地域の課題解決に向けた取り組みを、地域の方や多くのボランティアの方に支えて頂き、職員が協力しチームワーク力を発揮して、各事業活動を積極的に行いました。

誰もが住み慣れた地域で最後まで安心していきいきと暮らし続けられる地域を目指し、地域、区役所、区社協、地域ケアプラザが連携・協働して、1.地域で高齢者を支え合う体制づくり（助け合い・支え合いの地域づくり）、2.多様な主体による様々な生活支援・介護予防サービスの支援体制の充実・強化などのため、4月より生活支援コーディネーターが配置され、地域との顔の見える関係づくり、地域のニーズの把握などに努めました。

2025年に向け、「地域包括ケアシステム」を一層推進するために、「地域ケア会議」を開催し、多職種が連携し、個別支援と地域課題の把握などに努めました。

『第3期 神奈川区地域福祉保健計画（かながわ支え愛プラン）（計画期間：H28～32年度）』の「地区別計画」の推進初年度である今年度、地域、区役所、区社協と連携し、エリアの「地区別計画」の推進に努めました。

## 2. 利用者支援について

利用者については、新規利用者として新卒の方6名を法人全体で受け入れました。また、法人内で3名の方がより近くの施設に移行しました。退所利用者4名は、家庭生活が困難になり他法人の障害者支援施設等の入所や近隣の施設に移行しました。また、全体では、通所施設では利用者を増員することができましたが、入所のシーダ日野学園では、5月に1名の方が、病気で亡くなりました。多くの希望者の中から児童施設より加齢児の方を選考しました。

高齢化重度化していく中で、疾病による入院等で、平均利用率はなかなか上がりませんが、利用者増やしていく中で対応しました。年齢と共に身体機能の低下や疾病が見つかる等、食事や健康面では、栄養士や看護師又は精神科医師との連携は欠かすことができない状況になりつつあり、協力病院をはじめ近隣病院との連携の重要性も高まってきました。

高齢化・重度化していく利用者の支援内容の研鑽と共に、この地域に潜在する障害福祉のニーズに応えるようソーシャルワーク力を高めていきながら、各事業所・施設は利用者に寄り添い、人権の尊重を基本にしながら、意思決定支援（自己決定、自己選択）を大切に支援しました。

## 3. 職員の状況について

職員は、異動職員9名、新採用・中途採用職員は合わせて53名でした。

また、オリブ工房では、疾病等で休職者が出ました。その後、人員配置基準を下回る為、急遽、法人内で異動を行い職員体制を整えました。

「生活支援コーディネーター」の配置及び担当エリアの高齢者人口が多いことによる地域包括支援センターの加配による人員増（2名）が図られる等、地域ケアプラザ（地域包括支援センター）の役割が大きくなっています。

一昨年より法人全体で支援員の欠員が続いており、直ぐには充足できませんでした。更に新年度採用者の応募等、広報活動、ネット媒体、知人の紹介など必死に取り組みました。昨年同様、1年をかけて採用試験に取り組み、10回を超える面接日程を組みました。法人会報、各施設のたよりを通して家族、関係者に周知しました。なんとか年度末で最低限の職員を採用することができました。残念ながら本来の支援体制にするには充足できませんでした。育成を通して、離職させないことがもっとも大切ですが、とにかく異様な職員採用状況が続いています。時間とお金と労力を費やし、費用対効果も含めると今後更なる叡智が必要です。

人材の育成では、支援困難な利用者については課題も多くありますが、職員は個人に応じた支援力を高めて行ってきました。各施設内部研修に力を入れると共に、県連合主催の新人職員研修参加し、人権感覚を養うことに努めました、更に、支援向上のために、マカトン法基礎コース、てんかん援助セミナー等の外部研修に派遣し研鑽の機会を持ちました。

#### 4. 障害各事業所・施設活動報告について

##### (1) 利用者の入所・退所報告

事業所 施設	オリーブ工房 (パン工房)	ナザレ工房 (パン工房)	シーダひのき工房 カナシ工房	シーダ 日野学園	オリーブの家 (第1・第2)	ナザレホーム	眞砂ホーム (第1・第2)
定員	60名	60名	50名	生活70名 入所50名	11名	15名	20名
年度始 契約利用	63名	56名	55名	生活70名 入所50名	11名	14名	20名
入 所	2名 (新卒2名)	4名 (新卒4名)	0名	1名	0名	0名	0名
退 所	9名 (法人内通所へ7 名 他法人入所 2名)	1名	14名 (法人内通所へ)	1名 (病气死去)	0名	0名	0名
年度末 契約利用	54名	55名	41名	生活70名 入所50名	11名	14名	20名

##### (2) 職員の入職・退職・法人内異動報告 (パート職員も含む)

事業所 施設 (職員数)	オリーブ工房 (パン工房)	ナザレ工房 (パン工房)	シーダ ひのき工房 カナシ工房	シーダ 日野学園	オリーブの家	ナザレ ホーム	眞砂ホーム	神之木 地域ケアプラザ
	(28)	(30)	(29)	(68)	(11)	(19)	(18)	(32)
就任合計	7名	9名	10名	9名	4名	2名	2名	10名
(正職)	2名	5名	2名	4名	2名	2名	2名	2名
(臨職)	3名	0名	1名	1名	0名	0名	0名	1名
(パート)	2名	4名	6名	5名	2名	0名	0名	7名
異 動	2名	2名	1名	4名	0名	0名	0名	0名
退職合計	9名	8名	4名	4名	1名	2名	0名	6名
(正職)	0名	4名	1名	1名	1名	0名	0名	1名
(臨職)	8名	2名	0名	0名	0名	0名	0名	0名
(パート)	1名	2名	3名	3名	0名	2名	0名	5名
異 動	5名	1名	1名	5名	1名	0名	0名	0名

法人全体 年度内中途採用も含む ( ) 内は昨年度

就 任 53名 (50名)

内訳： 正職 21名 臨職 6名 パート 26名 異動 9名

退 職 34名 (58名)

内訳： 正職 8名 臨職 10名 パート 16名 異動 13名

### (3) 各事業の実施件数報告

① 生活介護事業年間実施日数 総支援日数 249日 (昨年度251日)

事業所・施設	オリブ工房 (パン工房含)	ナザレ工房 (パン工房含)	シーダひのき工房 (カナン工房含)
延べ利用数	13,568人	12,614人	12,366人
平均実利用者	54.5人 (54.3)	50.7人 (48.0)	49.6人 (49.6)
定員に対して 利用率	90.8% (90.5%)	84.4% (79.9%)	99.3% (99.3%)

②短期入所事業の利用人数及び利用日数

事業所・施設	オリブ工房 (パン工房含)	ナザレ工房 (パン工房含)	シーダひのき工房 (カナン工房含)	シーダ 日野学園
延べ利用人数 (昨年度)	4件 (21件)	25件 (31件)	55件 (31件)	413件 (441件)

③日中一時事業 (通所施設のための事業)

事業所・施設	オリブ工房 (パン工房含)	ナザレ工房 (パン工房含)	シーダひのき工房 (カナン工房含)
延べ利用件数	107件 (114件)	169件 (189件)	33件 (89件)

④送迎サービス (通所施設のための事業)

事業所・施設	オリブ工房 (パン工房含)	ナザレ工房 (パン工房含)	シーダひのき工房 (カナン工房含)
延べ利用人数	2,797件 (3,419件)	5,339件 (5,706件)	3,129件 (3,551件)

## 5. 神之木地域ケアプラザ活動報告

### (1) 地域活動交流事業

1. 子育て支援 2. 障がい者支援 3. 高齢者支援 4. 地域支援

### (2) 地域包括支援センター

【総合相談事業】～ 社会福祉士

①総合相談②権利擁護③高齢者虐待

【介護予防ケアマネジメント事業】～ 保健師等

●インフォーマルサービス活用の促進●介護予防ケアプラン作成研修の実施

●サービス担当者会議への参加●介護予防普及啓発事業の実施●介護予防普及啓発

【包括的・継続的ケアマネジメント支援業務】～ 主任介護支援専門員

#### 1. 地域住民・関係機関との連携推進支援

●地域住民等に対して制度・サービスの説明が適切に行えるように努めました。

●ケアマネジャーと関係機関等との意見交換会の開催支援を行いました。●地域包括ケアの推進のため、ケアマネジャーと医療関係者等との連携が深まるよう支援を行いました。

2. ケアマネジャー支援

- ケアマネジメントの質の向上に努めました。

3. 多職種協働による地域包括支援ネットワーク

- 個別ケース地域ケア会議を5月・7月・9月・1月に開催しました。
- 包括レベル地域ケア会議は、個別ケース地域ケア会議の振り返りにより、共有・整理された包

【生活支援体制整備事業】 ～ 生活支援コーディネーター

- 地域の特性を確認し、地域ニーズを把握
- 地域の活動の支援
- 協議体の設置
- 圏域レベルの目標

【介護保険部門】

- ①介護認定調査 117件 (前年比+6件) (※区との年初契約件数150件)
- ②ケアプラン(要介護者)作成件数 851件 (前年比▲1件)
- ③軽度者(要支援者)ケアプラン受託件数 190件 (前年比+5件)

(2) 通所(予防通所)介護事業(デイサービス)

1. 利用状況(年間延べ利用者数)

(要支援1・2)	762人	(前年比 ▲132人)
(要介護1～5)	4,944人	(前年比 + 215人)
計	5,706人	(前年比 + 83人)

2. 介護度別延べ利用者数 5,706人(注)( )内は構成比率

- 予防通所介護 762人(13.4%)  
(内訳)(要支援1)108人(1.8%)(要支援2)654人(11.5%)
- 通所介護 4,944人(86.6%)  
(内訳)(要介護1)895人(15.7%)(要介護2)2,369人(41.5%)  
(要介護3)918人(16.1%)(要介護4)474人(8.3%)  
(要介護5)288人(5.0%)

3. 1日平均利用人数 18.5人(前年比+0.3人)  
年間稼働日数 308日(前年比▲1日)

4. 契約者数(H29年3月31日現在)

(要支援1・2)	12人(前年比±0人)
(要介護1～5)	47人(前年比 ▲3人)
計	59人(前年比 ▲3人)

## 6. 事故報告・ヒヤリハット・苦情、要望解決

事業所 施設	オリブ工房 (パン工房)	ナザレ工房 (パン工房)	シーダ ひのき工房 カナシ工房	シーダ 日野学園	オリーブの家	ナザレン ホーム	眞砂ホーム	神之木 地域ケアプラザ
事故報告	24	20	10	83	3	3	14	1
ヒヤリハット	3	1	4	9	0	0	10	7
苦情・要望	1	1	0	0	0	0	0	0

### ①事故報告・ヒヤリハットの主な事由

- ・重複投棄
- ・転倒し受傷（打撲、裂傷）
- ・扉に指を挟む
- ・他害行為（噛む、叩く）
- ・利用者同士の他外行為による引っ掻き傷・擦り傷、打ち身等。
- ・投棄忘れ。
- ・園庭の花壇の柵の破損 被害届提出。
- ・自動通報装置の誤作動。
- ・和室の壁を蹴っ飛ばし破損。
- ・作業室のガラスを割る。
- ・階段から転倒。
- ・入れ歯の誤嚥。
- ・自動火災報知機誤作動。
- ・職員(けが・火傷)

### ②苦情要望の主な事由

- ・苦情解決制度に至らないものですが、以下列挙いたしました。
- ・利用者支援に関する要望や相談、家庭生活における相談が主なものでした。



7. 28年度事業所・施設の事業実施状況・評価等報告

事業運営・実施状況・評価等報告	
オリブ工房・パン工房オリブ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度の利用者は、定員60名に対して、新規利用者、新卒2名を迎え、利用契約者63名でスタートしました。開所時より活動を共にしてきました女性利用者2名の方が、ご家庭の事情で9月より市内の障害者支援施設に1月より千葉県内の障害者支援施設にそれぞれ入所いたしました。また、年度末には法人内の通所事業所に3名が異動いたしました。</li> <li>・平成13年4月に開所した従たる事業所パン工房オリブは、平成28年6月30日をもって閉鎖し、廃止届けを提出しました。7月より、パン工房の利用者と支援員は、オリブ工房にて一緒に活動しました。</li> <li>・主な行事も計画通り実施しました。特に、9月の旅行は、総勢87名で焼津へのバス旅行でした。台風13号の上陸の影響を心配しましたが、行程を多少変更しながら無事に行えました。</li> <li>・利用者支援で特に、ご家庭での生活に困難なケースを今年度受け入れました。関係機関とケースワークし、短期入所・ショートステイを全日程、繋いで実践しました。</li> </ul>
オリブの家	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「オリブの家」・「第2オリブの家」共に365日入居体制と職員は夜間勤務として、2年目でしたが、ローテーション勤務も滞りなく行えました。入居者との信頼関係づくりを大切に努めました。入居者は休日の過ごし方、実家への帰宅、睡眠等、生活リズムの変化が生じ、様々な課題もでてきましたが利用者に寄り添いつつ、地域支援担当、バックアップ施設との連携をもって支援してきました。</li> <li>・「オリブの家」は、入居者、男性2名と女性4名の計6名、「第2オリブの家」は、入居者、男性5名で入居者合わせて11名は変わりありません。入居者は、生活の幅を広げるために、ガイドヘルパーの利用で買い物やウォーキング等を楽しみました。ホームごとケーキ等を購入して誕生会を行い充実した生活を送っています。</li> <li>・グループホームのミーティングでは、地域支援担当、バックアップ施設との連携をもって、月ごとの利用者ケースカンファレンスを通してより良い支援を構築しています。</li> <li>・特に、女性入居者の一人は、一昨年の1月より実家帰省の際に親への粗暴行為が続くようになり、関係者のカンファレンス後、原則ホームでの生活を取り組み続けていますが、その間ホームでの声だしや粗暴行為による壁叩き等による隣家からの苦情はおさまりつつも、新世話人への粗暴行為があり緊張が続きました。本人の精神的安定と共に支援力を高めて取り組みました。</li> </ul>

ナザレ工房・パン工房ナザレ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 7月に開催したナザレまつりでは、利用者の作品販売を行うと共にパン工房ナザレのパンを2回に分けて販売し大盛況の内に終了しました。</li> <li>・ 10月初旬に1泊2日で焼津旅行に出かけました。2日間天候にも恵まれ、駿河湾の景色を眺めながらお風呂に入ったり、海の幸を味わい楽しい時を過ごしました。</li> <li>・ 感染症予防対策で、インフルエンザの予防接種を、利用者・職員共に嘱託医の病院で実施いたしました。11月末から下痢・嘔吐等の症状が見られる方が、断続的に見られましたが12月中旬には収束しました。症状が見られた方については、一定期間昼食時の食器の下膳を別にして消毒する等して感染拡大の防止に努めました。入院手術を行った方には、工房職員が定期通院に付添いサポートしました。</li> <li>・ 新規利用者4名を加えて56名でスタートしました。7月に退所者があり55名の在籍で年度末を迎えました。定員に対する割合は84.4%となっています。</li> <li>・ 新年度は、新規採用2名、法人内異動2名でスタート致しました。7月にオリブ工房へ法人内異動があり、7月から年度末までに8名の職員が退職し、パート職員4名を含めた7名の職員を採用しました。</li> </ul>
ナザレンホーム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 365日運営になり2年目となりました。昨年度新規利用を開始した8名（ナザレンホーム3名、第2ナザレンホーム5名）も新しい生活に少しずつ慣れて、安定した生活を送る事ができるようになりました。ガイドヘルパーの利用も積極的に行い、余暇活動の充実を図りました。両ホーム共に世話人や夜間のパート職員が確保できずに、地域支援担当職員を世話人として配置したり、工房職員もフォローしながらの運営でした。町内の夏祭りや防災訓練に参加する等して、町内の一員としての役割も担うようにしました。</li> <li>・ ナザレンホームは、昨年度、入居者6名の女性ホームとして365日運営を開始いたしましたが、新規入居した3名も少しずつホームでの生活に慣れてきました。特に新しい生活に不安を覚えて支援者と一緒に就寝していた方もホームでの生活の積み重ねと職員が寄り添い不安を取り除く取り組みを継続する事で、一人で自室で眠れるようになりました。週末は定期的に帰宅している方もおりますが、ホームで過ごしている方の余暇活動充実の為に、ガイドヘルパーの利用を広げていく事が課題となっております。</li> <li>・ 第二ナザレンホームは、昨年度、入居者8名の男性ホームとして、新たな場所でスタートいたしました。ホームへの移動で送迎車を利用する方が殆どでしたが、通勤時にガイドヘルパーを利用する方が増えてきて送迎の件数も減りました。週末の生活の幅を広げる為に、各自の要望に応じていく為にガイドヘルパーの利用を増やしていく事が課題です。また、昨年度横浜市大病院に転院して睡眠時間を整える為に服薬調整を行っていた入居者が、まだ、課題はありますが一定のリズムで睡眠が確保できるようになり、11月に地域の病院へ戻りました。日頃から口腔ケアを丁寧に行っておりますが、加齢による歯周病の対応で通院するケースが増えてきました。</li> </ul>

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">シーダひのき工房・カナン工房</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本体施設シーダひのき工房と従たる事業所カナン工房の両事業所において、情報共有しながら一体的に運営を進めてきました。</li> <li>・ 経営面では、定員を越える利用者を受け入れて、送迎サービスもニーズに可能な限りで対応し、出勤率アップ収入アップに努めてきました。</li> <li>・ 利用者の高齢化に伴い出現してくる様々な心身の状態の変化や課題、本人並びに家族のニーズに柔軟に対応できるように心がけてきました。</li> <li>・ 職員については、年度途中の退職、産休の補充のため求人活動を続けてきましたが、12月に正職員を採用することができました。</li> <li>・ 支援においては、職員が整わない中でしたが、利用者が安全で安心して過ごせ、個々に豊かな活動を提供できるように取り組んできました。また作業室のパーティションを仕切るなどして、利用者が安心して過ごせる空間を作り、合同で利用者を見守ることに取り組んできました。個別ケースでは、高齢期にさしかかりこれまでシーダ以外のサービス利用のない方々にアプローチし、契約や実際のサービス利用に漕ぎ付けました。</li> <li>・ 行事については、教養娯楽活動の充実や日々の生活にメリハリをつけることを目的として、計画通りに行えました。</li> <li>・ 地域交流については、利用者の生活の安定を第一としつつ、できる範囲で前向きに受け入れ、関わりを深めてきました。</li> <li>・ カナン工房については、委託販売や店頭販売も積極的に進めてきました。特に秋から冬にかけてはバザー出店やクリスマス時期の注文を多く頂き、クッキー製造に忙しい日々を送ってきました。年度末で事業廃止が決定しているところで、中区小港の新事業所開所に向けて移行準備を進めました。</li> </ul>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">シーダ日野学園</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「日野学園障害者虐待再発防止計画Ⅱ」に基づき、ユニットの閉鎖性を打破する取り組みを行ってきました。 具体的には、ユニット間職員交流研修の実施や、「合同生活」の企画実施に取り組んできました。</li> <li>・ 生活介護事業は、眞砂ホーム利用者20名を加えて70名で実施しました。通常作業を始め、ユニットの日帰り旅行など余暇活動も適宜配置し、メリハリのある活動が送られました。</li> <li>・ インフルエンザやノロウイルス罹患によるユニット閉鎖は合計7回ありました。迅速に対応し、感染拡大防止に努めてきました。</li> <li>・ 職員の心身の健康増進を目的として「産業医」を選定し、衛生委員会を毎月開催する中で、職員の検診結果の確認や職場巡視、超勤や労災の実態の確認等を行ってきました。</li> <li>・ 10月に全職員を対象に「ストレスチェック」を実施しました。</li> <li>・ 地域交流では、地元町内会の盆踊りや福祉バザーへの出店、参加の他、シーダ祭や喫茶「麦」でのパン販売等継続して実施してきました。</li> </ul>

<p>眞砂ホーム</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事業開始4年目を迎えて、ホームでの生活日野学園での日中活動という生活リズムが定着し、落ち着いて過ごせました。</li> <li>・ホームでは個人の時間の過ごし方は確立し、共同生活では仲間意識も高まりお互いに支え合う姿も出てきています。</li> <li>・利用者間のトラブルや、他害行為等強い行動障害を持つ利用者への対応について、職員は苦心しつつも連携強化を図り支援にあたってきました。</li> <li>・インフルエンザ罹患によるユニット閉鎖がそれぞれのユニットでありました。迅速に対応し、感染拡大防止に努めました。</li> <li>・シーダ日野学園職員と同様に、10月に全職員を対象に「ストレスチェック」を実施しました。</li> <li>・地域との関係は開所当時より変わらず良好です。町内会の役割も担いつつ盆踊りや防災訓練にも参加してきました。</li> <li>・ホーム駐車場の一角に空き缶回収ボックスを設置し、近隣に呼び掛けを行い、日野学園のリサイクル班の回収にもご協力頂いてきました。</li> </ul>
<p>神之木地域ケアプラザ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「支援が必要な人に寄り添い丁寧な支援」を行うことを目標に、行政、区社協、地域、保健・医療機関、同業者等と連携・協働し、地域の課題解決に向けた取り組みを、地域の方や多くのボランティアの方に支えて頂き、職員が協力しチームワーク力を発揮して、各事業活動を積極的に行いました。</li> <li>・誰もが住み慣れた地域で最後まで安心していきいきと暮らし続けられる地域を目指し、地域、区役所、区社協、地域ケアプラザが連携・協働して、1.地域で高齢者を支え合う体制づくり（助け合い・支え合いの地域づくり）、2.多様な主体による様々な生活支援・介護予防サービスの支援体制の充実・強化などのため、4月より生活支援コーディネーターが配置され、地域との顔の見える関係づくり、地域のニーズの把握などに努めました。</li> <li>・2025年に向け、「地域包括ケアシステム」を一層推進するために、「地域ケア会議」を開催し、多職種が連携し、個別支援と地域課題の把握などに努めました。</li> <li>・『第3期 神奈川区地域福祉保健計画（かながわ支え愛プラン）（計画期間：H28～32年度）』の「地区別計画」の推進初年度である今年度、地域、区役所、区社協と連携し、エリアの「地区別計画」の推進に努めました。</li> <li>・「生活支援コーディネーター」の配置及び担当エリアの高齢者人口が多いことによる地域包括支援センターの加配による人員増（2名）が図られる等、地域ケアプラザ（地域包括支援センター）の役割が大きくなっています。</li> </ul>